



「或教授の退職の辞」

四高の学生時代といふのは、私の生涯に於て最も愉快な時期であった。
 青年の客気に任せて豪放不羈、何の顧慮する所もなく振舞うた。
 その結果、半途にして学校を退く様になった。

頂天 立地 自由人

西田
幾多郎の
青春時代

令和3年 10/5(火)～令和4年 3/21(月・祝)

※新型コロナウイルスの感染状況により変更となる場合があります。ご来場の前にホームページをご確認ください。

企画展開連
イベント

朗読と座談会 「幾多郎と仲間達」

朗読：茶谷幸也氏*幾多郎が学生時代を振り返って書いたエッセイの朗読
 座談会ゲスト：金沢ふるさと偉人館副館長(学芸員) 増山仁氏 / 鈴木大拙館学芸員 猪谷聡氏

【と き】 令和4年 2/11(金・祝) 14:00～15:30
 *建国記念日：幾多郎が仲間と記念撮影した日
 【と ころ】 哲学館 5F 展望ラウンジ [定員] 20名
 【要申込(先着順) / 参加費無料】 令和4年1月4日より受付開始

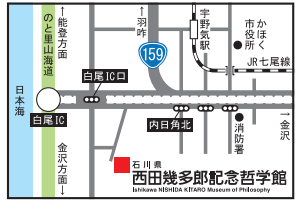
石川県
西田幾多郎記念哲学館
Ishikawa NISHIDA KITARO Museum of Philosophy

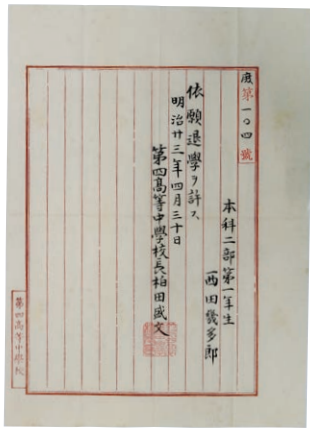
〒929-1126 石川県かほく市内日角井1
 TEL(076)283-6600 FAX(076)283-6320
 URL <http://www.nishidatetsugakukan.org/>
 E-mail nishida-museum@city.kahoku.lg.jp

■facebook でもイベント関連情報を随時更新しています。

開館時間 ■9:00～17:00(入館は16:30まで)
 休館日 ■月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始(12月29日～1月3日)
 観覧料 ■一般300円(団体250円:20名以上) / 高齢者(65歳以上)200円
 / 高校生以下無料

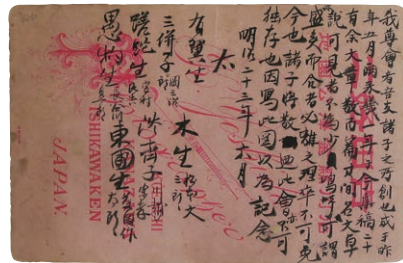
交通アクセス
 【車利用】北陸自動車道 [金沢東IC]-国道159号線(約20分)
 のと里山海道 [白尾IC]-約5分
 【JR利用】金沢駅-IRいしかわ鉄道線・七尾線(約25分)-宇野気駅-
 徒歩(約20分)-哲学館





③第四高等中学校依願退学の許可文書
明治23(1890)年4月30日

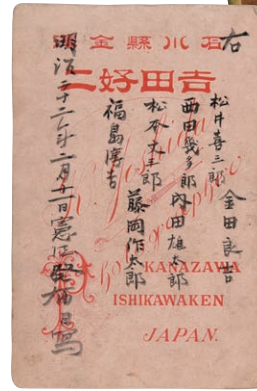
②第四高等中学校評点表
明治22年(1889)年7月
幾多郎の行状点は「8点」。幾多郎は文科一年を落第し、理科一年に転科するも翌年中退する。



④文芸サークル「我尊会」の仲間と
明治23(1890)年6月撮影
幾多郎20歳、後列右



①明治憲法発布の日写真
明治22(1889)年2月11日撮影
幾多郎18歳、後列右より二人目



頂天立地自由人

ちやうてんりっちじゆうじん

西田幾多郎の青春時代

令和3年 10/5(火)～令和4年 3/21(月・祝)

ここに、一枚の写真があります①。
明治二十二(一八八九)年二月十一日、明治憲法発布の日に十八才の幾多郎が高等学校の仲間達と撮った写真です。ともに写る親友・山本良吉(旧姓・金田)は「頂天立地自由人」という字を掲げ、また別の友人は「Destroy Destroy」「破壊」という字を掲げています。反抗心に満ちたこの写真の背景には、時代によって翻弄された彼らの学校生活がありました。

当時彼らが在籍していた第四高等中学校は、明治二十年に開校したばかり。もとは、加賀藩の藩校の流れを汲む「石川県専門学校」だったが、中学校令に基づいた官立の「第四高等中学校」となりました。石川県専門学校は外国語で専門の学業を授ける学校で、地元出身の優秀な教師・生徒が集まっており、皆友達のような本当に家族的な学校でした。それが、第四高等中学校となったからは校風も教師も一変し、師弟の間に親しみのあつた暖かな学校から、たちまち規則がくめな武断的な学校に変わってしまっています。学問文芸にあこがれ、き

わめて進歩的な思想を抱いていた幾多郎やその仲間たちは、薩摩から来た教師陣に反発し、次々と抵抗運動を展開します。行軍(肉体強化を目的とした準軍事訓練)や兵式体操は出来る限りさぼり、つまらない授業はポイコット、学力が十分ではないとみなした教師には間違いを指摘してやりこめました。その結果、幾多郎は行状点不足(素行不良)で留年となりますが、血気盛んな当時の幾多郎は「不満な学校をやめても独学でやっていける」と自ら中退します。そんな抵抗運動の最中に撮られたのが、この写真でした。独立独行で途を開いていくこととする彼らの精神と、近代憲法の樹立を重ねあわせたのでしょうか。

四高中退はその後の幾多郎の人生で苦勞が続く一因となるわけですが、本人は晩年に「私の生涯に於て最も愉快な時期であった」と回顧しています。移り変わる明治期に、進歩的な精神のもと自由奔放にふるまい、青春を謳歌した幾多郎と仲間達。大哲学者の青春時代を紹介します。

私は私自身の経験に照らして「私といふもの」のできたのは、

高等学校時代の友人関係であるかと思ふ。それが今日まで私といふ

ものの基礎となつて居る様に思ふ。

堀維孝君の「四高三々塾について」を讀みて

①(3)(4)(5)(6)「山本良吉君の思出」(2)「明治の始頃、金沢の古本」(7)「或教授の退職の辞」